

なんだよ……それも俺一人だけぢやないんだ。」

「一體どこにゐるんだね？」とバヴルーシヤは訊ねた。

「古い方の紙漉場さ。」

「お前らは工場へ行つてるのかい？」

「そりや、行つてるとも。俺は兄貴のアヴヂューシカと、伸し手をやつてるんだ。」

「へえ、お前は工場もんなのか……」

「それで、どうしてお前は家魔の聲なんか聞いたんだい？」とフェーチャが口を入れた。

「かういふわけなのさ。俺はな、兄貴のアヴヂューシカと、フォードル・ミヘーフスキイと、イワーシカ・コソイと赤^{カラスノオノ}丘から来たもう一人のイワーシカと、イワーシカ・スホルーコフと、それからまだ他にも仲間があつたんだ。みんなで十人ばかりの連中が當番の組になつてゐて、紙漉場で宿直らなくちやならない事になつた。と云つて、本當の宿直りといふわけぢやないけれど、監督のナザーロフが「お前たち、家までのこく歸ることはいりやしない、明日は仕事がうんとあるんだから、家へ歸るのは止めた方がい。」つて、足止めを食はしたのさ。で、仕方がないから居残つて、みんなで一緒にごち纏してると、アヴヂューシカがこんな事を云ひだすぢやないか。おい、み

んな、ひよつと家魔が出たらどうする？……アヴヂューイがかう云ふか云はない中に、誰やら急に俺たちの頭の上を歩き出したんだ。俺たちが下で横になつてゐると其奴は上の方で水車の邊を歩いてゐるのさ。ちつと聞いてると、其奴が歩く度に板がしなつて、みししと音がするんだ。その中に、俺たちの頭の上を通り過ぎてしまふと、だしぬけに水がざあ／＼と水車に流れ込んで、水車がごと／＼と音を立てながら廻り出した。ところが、水門の口は閉まつてゐたんだからね。一體だれが水門を開けて、水を落としたんだらうと、不思議で堪らなかつたけれど、水車は暫らくくる／＼廻つて、それきりまた止まつてしまつたよ。やがて足音は二階の戸口の方で聞こえて、今度は階段傳ひに下りて来るぢやないか。こんな風にゆつくりゆつくり下りて来るんだ。段々が足の重みでめきめき云ふ位……その中に、いよく俺たちの部屋の前戸口まで来て、暫らくの間ぢいつと立つてゐる様子だつたが——いきなり戸がぱつと一杯に開いてしまつたのさ。みんなぎよつとして見たけれど——なんにもゐるやしない……ふつと見ると、一つの紙漉桶の傍に置いてあつた濾し網が動き出して、ひよいと持ち上がつて、水の中に一度浸つたかと思ふと、まるで誰か揺つてでもゐるやうに、宙を右に行つたり左に行つたりしてゐたが、また元の場所に納まつちまつたよ。それからもう一つの桶

の傍にあつた鉤が釘から外れたが、また元の釘に引つかつた。それから今度は誰か戸の傍へやつて来て、いきなり咳をし出すぢやないか。まるで羊かなんかのやうに、大きな聲で「ほん／＼とやるんだ……俺たちはみんな一塊りになつて、お互ひ同志身體の下に頭を突つこんでしまつたよ……その時は本當におつたまけたもんだ！」

「へえ、さうかい！」とバーエルは云つた。

「だが、なんだつてそんなに咳をしたんだらう？」

「わからない、事によつたら濕つほいせゐるかも知んない。」

みんなは暫らく黙つてゐた。

「どうだ、」とフェーチャが訊いた。「馬鈴薯は煮えたかい？」

バヴルーシャは薯を突づいてみた。

「いや、まだ生煮えだ……おや、跳ねやがつたぞ。」川の方へ顔をむけて、彼はかう附け足した。「きつと椀魚だらう……ほれ、星が飛んだ。」

「おい、みんな、俺がいゝ話を聞かしてやらう。」と、コスチャがか細い聲で云ひ出した。「あのな、

*バヴルーシャ(愛稱)の本名。(編者)

この間、父つあんがみんなに話してくれた事なんだよ。」

「よし、聞かして貰はうや。」

とフェーチャが、もう兄貴分らしい顔をして云つた。

「ねえ、お前らはガヴリーラを知つてるかい、大村の大工のよ？」

「うん、そりや知つてるとも。」

「あの男がどうして何時もあんな陰気な顔して、黙りこくつてばかりゐるか、その理由を知つてるかい？ あいつがあんなに陰気なのは、かういふ譯さ。父つあんが話して聞かしたけれど、あるとき、胡桃を取りに森へ行つたんだよ。いゝかい、胡桃を取りに森へ行つたところが、道を迷つて矢暮と歩いてゐるうちに、飛んでもない所に入りこんでしまつたのさ。一生懸命にあちこち歩き廻つたけれど——駄目だ！ どうしても道が見付からない。するうちにもう夜になつちまつた。そこで仕方がないから、樹の下に腰を下ろして、まあ、夜の明けるのを待つとしよう、と云ひながら、尻を据ゑて、うとうと居眠りを始めたわけさ。うとう／＼しかけたと思ふと。だしぬけに誰か奴を呼ぶ聲が聞こえるぢやないか。眼を開けて見ると、誰もゐやしない、そこで又うとう／＼すると——また呼ぶ聲がする。もう一ど眼を開けて見ると、前の木の枝に水精がゐて、ゆらく／＼と揺れながら、

大工を呼んでゐる。そのくせ息が止まりさうなくらゐる笑つて、笑ひ轉けてゐるのだ……と
 ころで、月の光りが眞つ登間のやうに明るいので、何も彼もすつかり見通しなのさ。水精は相變は
 らず呼んでゐるのだが、身體ぢうが透き通るやうに白くつて、枝に腰かけてゐるところは、まるで
 鯉か白楊魚か——でなければ、ほら、鮎かなんぞのやうに、白つほくて銀色に光つてゐるんだ……大
 工のガヴリーラはほうつと氣が遠くなつてしまつた。でも、水精の方はやつぱりから／＼笑ひなが
 ら手をあけて、おいで／＼をしてゐるんだ。もうガヴリーラはすんでのことと起き上がつて、水精
 の云ひなりにならうとしたが、きつと神様が智慧を授けて下すつたんだらう、いきなり自分の胸に
 十字を切つた……その十字を切るのに、とつても骨が折れたつてよ。手がまるで石みたいになつて、
 思ふやうに動かないんだ。え、どうだ、えらいもんぢやないか……それで、やつと十字を切ると
 な、水精は笑ふのを止めてしまつて、急におい／＼泣き出すぢやないか……泣きながら髪の毛で眼
 を拭くんだが、その髪の毛といふのが、まるで大麻のやうに眞つ青なのさ。それで、ガヴリーラは
 つく／＼とその様子を眺めてゐたが、「おい、森の化物、なんだつて泣くんだ？」と訊いたんだ。す
 ると、水精はその返事に、「これ、人間、お前さん十字なんか切らなけりやい、のに、そんな事をし
 なけりや、私と一語に死ぬまで面白く暮らせたものを。お前さんが十字なんか切るものだから、私

はそれが悲しくて泣いてゐるのだよ。でも私一人がくよく／＼するばかりぢやない、お前さんも生涯
 くよく／＼して暮らすやうにしてやるから。」かう云つて、見えなくなつてしまつたんだ。するとガヴ
 リーラは、忽ち森から出て行く道が分かつたさうだが……それからといふもの、あの男はいつも陰
 氣な顔をしてゐるのさあ。」

「へーえ」と、フェーチャは暫らく黙つてゐた後、かう云ひ出した。「だが、どうしてそんな森の化
 物なんか、基督信者の魂を傷ものにすることが出来るんだらう——だつて、ガヴリーラはそいつの
 云ふことを聞かなかつたんぢやないか？」

「あゝ、それからな、お前——」とコスチャが云つた。「ガヴリーラの話ぢや、水精の聲はとても細く
 つて悲しさうで、まるで蠅の聲みたいだつてよ。」

「そりや、お前の父つあんが話して聞かせたのかい？」とフェーチャが言葉を續けた。

「さうよ。俺は天井床に寝てて、すつかり聞いたんだ。」

「變な話だな——なんだつて、くよく／＼する事があるんだらう？……してみると、ガヴリーラは
 水精の氣に入つて、それで呼ばれたんだな。」

「さうよ、氣に入つたのよ！」とイリュエーシャが相槌を打つた。「さうとも——水精はガヴリーラを

探つてやらうと思つたんだ、きつとさうに違ひない。それが奴等の、水精の十八番なんだからな。」
 「だが、こゝらにきつと水精があるに違ひないぜ。」とフェーチャが云つた。

「いんや、」とコスチャが答へる。「こゝはからりとした、清潔なところやないか。でも、川が近くにあるにやあるけれど。」

みんなはちよつと話しやめた。不意にどこか遠くの方で殆ど呻くやうな物音が、長く尾を引きながら、ちいんと響き渡つた。それはとき／＼深い静寂の中から湧き起こつて、上へ上へと昇つて行き、暫らく空中にたゆたつた後、静かに擴がりながら消えて行く、かの不思議な夜の物音の一つであつた。耳を澄ましてみても、一向なにも聞こえないやうだけれど、やはり妙にちいんと響くのである。それは誰かが天と地の接するあたりで、長い長い叫びを上げると、もう一人誰かほかの者が森の中から、細い鋭い笑ひ聲でそれに應じ、弱々しいじゆ、うといふ響きが川の面を走つてゆくやうな具合である。子供らは顔を見分はせて、身慄ひした……

「俺たちには神様がついてゐて下さるよー」とイリヤーが呟いた。

「やい、臆病もの！」パーエルが叫んだ。「なにをびく／＼してゐるんだ？　みろ、馬鈴薯が煮えたぢやないか。(一同は鍋の傍に集まつて、湯氣の立つ馬鈴薯を食べ始めた。たゞワーニャだけは身動

きもしなかつた。)

「おい、どうしたんだ、お前？」とパーエルは云つた。

けれど、ワーニャは席の下から這ひ出さうとしなかつた。鍋はみる／＼空になつてしまつた。

「おい、みんな、聞いたかい。」とイリューシャが云ひ出した。「この間プルナギーツイであつた事を？」

「あの土堤の上であつた事かい？」とフェーチャが訊ねた。

「うん、うん、土堤の上であつた事さ、あの切れた土堤の上だよ。あれこそ、ほんとに化物でも出さうな氣味の悪いところで、とても淋しいところなんだ。まはりは一面に窪地や谷ばかりで、谷の中にや何時も蛇があるやがる。」

「うん、それで何事があつたんだい？　話して聞かせろよ……」

「ほかでもない、こんな事さ。フェーチャ、お前は知らないだらう、があすこにや土左衛門が埋めてあるんだ。それはすつと、すつと前、池がまだ深かつた時分に身投げしたんで、いまだにその墓が見えてるよ。でも、ほんのちよつとびり見えるだけで、たゞ土が盛り上がつてただけなのさ……」
 ところで、二三日前にお邸の番頭が獵犬番のエミールを呼んで、おい、エミール、驛邊へ行つて來い
 つて云つたんだ。エミールは何時も驛邊へ使ひに行くのが役目なのさ。自分の預かつてゐた犬をす
 っかり死なしてしまつたのでな。どういふわけか、奴の手にかゝると犬が保たないんだ。どうして

も永續きしないんだよ。それでゐて、當人はい、獵犬飼で、どこといつて難はないんだけどな。そこで、エミールは郵便を受け取りに馬で出掛けて行つたが、町で手間取つて、歸りにはもうい、加減酔つぱらつてゐたのさ。四邊は夜景色で、明るい晩なのだ、月が照つてゐるのでな……かうして、エミールは土堤の所へ來か、つたわけだ。さういふ道筋になつてゐたのさ。獵犬番のエミールが暢氣にこゝまでやつて來ると、見れば、土左衛門の墓の上に小さな羊があるぢやないか。眞つ白でこんな風に毛のくるくろ捲いた可愛い奴が、ちよこく歩き廻つてゐるんだ。そこでエミールには、
 「よし、一つあいつを捕へてやらうー 打つちやつておけば、とられちまふばかりだ。」と考へて、馬から下りて、小羊を兩手に抱き上げた……ところが、羊の奴は平氣なんだ。エミールが馬の傍まで來ると、馬は鼻を鳴らしながら飛び退いて、頻りに首を振るぢやないか。けれど、そいつを「どろく」と宥めて、羊の仔を抱いたまゝ鞍に跨がつて、また先きへ先きへと行つた。羊は胸の所に抱へてゐたのさ。ひよいと見ると、小羊はぢいつと正面にエミールの顔をみつめてゐるぢやないか。こつちは、獵犬番のエミールは、薄氣味が悪くなつて來た。「こんな羊が人の顔をみつめるなんて、聞いた事もない話だ。」と思つたが、それでも別に變はつた事もない。毛をこんな風に撫でて、「これ羊よ、羊よ」と云ふと、羊の奴はだしぬけに齒をむき出して、同じやうに、「羊よ、羊よ」つて云ふ

ぢやないか……」

イリュージヤがこの最後の言葉を口から出さなにかに、突然二匹の犬が一齊に跳ね起きて、けたましい聲で吠え立てながら、いきなり火の傍を駆け出し、闇の中に消えてしまつた。子供たちはみんなはつとなつた。ワーニヤは例の席の下から跳ね起きた。バヴルーシヤは大聲を上げながら、犬の跡から飛んで行つた。犬の吠え聲は忽ち遠ざかつて行く……やがて憎えたらしい馬の群れのざわ／＼と駈け廻る聲が聞こえた。バヴルーシヤは聲高かに「白！ 黒！……」呼びたててゐる……やゝあつて、吠え聲は静まり、バーエルの聲ばかりが遙か遠くから聞こえて來る……また暫らく経つた。子供たちはどうなる事かと待ち構へるやうに、怪訝さうに眼と眼を見交はしてゐた……不意に奔馬の蹄の音が聞こえた。馬は焚き火のすぐ傍でびつたりと立ち止まつた。バヴルーシヤは驚に手をかけるが早い、ひらりとその背中から飛び下りた。二匹の犬もやはり光りの圓の中へ飛び込んで、赤い舌を吐きながら、すぐそこへ坐つた。

「何事だ？ どうしたのだ？」と子供たちは訊ねた。

「なんでもないよ。」とバーエルは馬の方へ片手を軽く振つて、かう答へた。「なに、犬のやつが何か嗅ぎつけたんだよ。俺は狼だと思つたもんだから。」胸一杯に、はあく／＼と大きく呼吸をしながら、

彼は平氣な聲で云ひ足した。

私は思はずバヴルーシヤの姿に見とれた。この時の彼は實に美しかった。その醜い顔は早乗りのために生き生きと活氣づいて、俠らしくきつぱりした凛々しさに燃えてゐた。手に小枝一つ持たないで、よる夜中たつた一人、一刻も躊躇しないで、狼を追ひに馬を飛ばしたのだ……「なんといふ素晴らしい子だらう！」と、私は彼を見ながら考へた。

「お前は、何かい、狼を見た事があるかい？」と臆病者のコスチャが訊ねた。

「あんなものはこの邊に何時でもうよく／＼してゐるよ。」とバリエルは答へた。「でも、奴等が暴れるのは冬だけだ。」

彼はまた焚き火の前にしやがんだ。地べたに腰を落ちつける拍子に、一匹の犬の毛むくぢやらな頸筋に手が載つかつた。すると、犬はさも嬉しうに、感謝と得意の表情でバヴルーシヤの横顔を眺めながら、いつまでも首を動かさないうで、ちつと蹲まつてゐた。

ワーニヤはまた席の下にもぐりこんだ。

「だが、イリューシヤ、お前のした話は本當におつかない話だな。」とフェーチャが口を切つた。彼は俗福な百姓の息子なので、いつも音頭を取るやうな風になつてゐた。(そのくせ、自分では品格を

落とすのを恐れるやうに、あまり口數を利かないのであつた。)「それに、さつき犬が吠え出したのも、何か化けものの仕業だつたんだぜ……うん、さうだ、俺も話に聞いてゐたが、あそこは化けもの出るとこさうぢやないか。」

「ブルナギーツィかい？……さうともよ！ あそこは特別ひどい處なんだ！ あそこでは、何度も大旦那様を——死んだ前の旦那様を、見た者があるといふ話だぜ。裾の長い上衣を着て、あつちこつち歩き廻つてな、のべつ、頻りに溜め息をつきながら、何やら地べたの上を探してゐるんだとよ。トロフィームイチ爺さんも、一ど出會つた事があるさうだ。『旦那様、イワン・イワーマイチ、そんなに地べたを御覽になつて、何を探しておいでになります！』と訊ねたところ……」

「おちいさんがさう訊いたのかい？」とフェーチャが吃驚して口を出した。

「うん、訊いたんだ。」

「ふむ、それがほんとなら、トロフィームイチは偉いもんだ……さあ、それで旦那はなんと仰しやつた？」

「錠切草を探してゐるんだ、といふ返事だつたが、その聲がとても低くて、低くて、『錠切草』と、こんな風なんだよ。『全體、錠切草なんかを何になさるので、旦那様、イワン・イワーマイチ？』と

訊ねると、「歴しつけるんだ、トロフィームーイチ、墓が歴しつけて苦しいから、外へ脱け出さうと思つてな」と……」

「ほう、なんてこつた！」とフェーチャが云つた。

「してみると、この世の暮らしが足りなかつたんだな。」

「なんてたまけた話だ！」とコスチャが口を入れた。「俺はまた萬聖節でなけりや、死人は見られなと思つてゐたつげが。」

「死人はいつだつて見られらあ。」とイリューシャが確信ありけな調子で引き取つた。この子は私が見たところでは、誰よりも村のかつき話に通じてゐるらしかつた……「だけど萬聖節にや、生きてる者でもその年に死ぬ番が廻つてゐる人なら、ちやんと分かるつて話だよ。夜、教會の玄関に立つて、ちいつと街道の方ばかり見てりやいゝんだ。さうすりや、その年に死ななけりやならない人間が、街道傳ひに通り過ぎて行くつてよ、ほら、村のウリヤーナ婆さんもつい去年、教會の玄関へ見に行つたぜ。」

「それで、誰か見えたのかい？」とコスチャが面白半分に訊ねた。

「見えたとも。初めだいぶ長い間、ちいつと坐つて待つてゐたけれど、一向だれの姿も見えなけり

や、足音も聞こえない……たゞ、何處かで大つころが變な聲で吠えてゐる。いつまでも吠えてゐるやうな氣がするのさ……その中にひよいと見ると、襦袢一枚きりの男の子が道を歩いて來るぢやないか。ちいつと見透かすと——イワトシカ・フェドセーフがやつて來てるんだ……」

「あの、この春死んだあれかい？」とフェトチャが遮つた。

「あゝ、あのイワトシカさ。とほ／＼と歩いて、顔も上げないんだ……でも、ウリヤーナは誰だか見分けがついたのさ……ところが、また見ると、今度は婆さんが歩いてゐる。ウリヤーナが一生懸命に透かして見ると、え、おい、驚いたらう——その道を歩いてゐる婆さんは、自分なんだよ、當人のウリヤーナなんだよ。」

「へえ、そんな事があるのかい？」とフェーチャが訊ねた。

「ほんたとも、嘘は吐かない。」

「でも、變だな、あの婆さんはまだ死なないぢやないか？」

「そりや、まだ一年経たないからだよ。見るが、今だつて骨と皮ばかりだから。」

みんなは又ひつそりとなつた。パーエルは枯枝を一握り火の中にくべた。すると枯枝は、ぱつと燃え上がった焔の中にくつきりと黒く浮き出し、ぱち／＼と音を立て、煙を吹き出したかと思ふと、

焦けた端の方を反らしながら、うね／＼動き出した。光りの反射は、塵埃するやうに慄へながら、四方八方へ、とりわけ上の方へ延びた。不意に、どこからとも知れず、一羽の白い鳩が飛んで来て、この光りの圓の中へ入った。燃えるやうな反射を一ぱいに浴びながら、暫らく一ところでぐる／＼廻つてゐたが、やがて、しゅつ／＼と羽音を立てながら消えてしまった。

「大方家からはぐれたんだらう。」とパーエルが云つた。「かうなつたら、何かにぶつ、かるまでいつまでも飛んでる事だらうよ。ぶつ、かつたら、そこで朝まで夜明かしだ。」

「どうだらうな、バヴルーシャ、」とコスチャが云ひ出した。「あれは正直な人間の魂が天へ昇つて行つたんぢやないかな、え？」

パーエルは枯枝をもう一握り火に焚べた。

「さうかも知れない。」暫らく経つて、彼はかう答へた。

「ぢや一つ聞かして貰はう、バヴルーシャ。」とフェーチャが口を切つた。「お前の方のジャーラモブ町でも、天道様のお前光が見えたかい？」

「お日さまが見えなくなつた、あれかい？ そりや、見えたとも。」

「さぞ、お前らもたまけたことだらうな？」

「なに、俺たちばかりぢやないさ。うちの旦那だつて、前からお前光があると、俺たちに購縛して下すつたくせに、暗くなり出すと、自分でもすつかりびく／＼ものだつたつて話だ、ほんとによ。女中部屋にゐた料理番の婆さんなんか、お日さまが暗くなり出すが早いか、まあどうだ、いきなり、火掻きでありたけの瓶を叩き毀して、竈の中へ打ちこんぢまつたぜ。世の最後が来たんだもの、今さら誰も、ものを食ふ人はありやしない。」といふわけさ。それで、菜つ葉汁がその邊に一杯こぼれる騒ぎなんだ。ときに、俺たちの村ぢやこんな噂があつたつて。白い狼が世の中を駆け廻つて、人間を取つて食ふだの、鷲や鷹が飛んで来るだの、やれ、恐ろしいトリリーシカの妻が見えるだのつて。」

「その、トリリーシカつていふのはなんだい？」とコスチャが訊いた。

「お前、知らないのか？」とイリユーシャは熱くなつて引き取つた。「へえ、トリリーシカを知らないなんて、お前は誰だこの者だい？ お前の村の連中は井戸ん中の蛙で、よその事はなんにも知らないんだな！ トリリーシカといふのはな、いづれこの世界へやつて来る凄惨な奴で、とても凄惨な顔をしてやつて来るんだ。さうすると、掴まへる事も出来ないし、何一つ手を出すわけにも行かないんだ。本當にさういつた凄惨な奴なのさ。基督信者の百姓が、そいつを掴まへようと思つて、櫂の棒なんか持つて掛かつて行つてよ、周りをぐるりと圍んでしまつても、そいつはみんなの眼を睨まして

しまふんだ——すつかり目をくらましてしまふもんだから、百姓らは却つて同志打ちをやらかすといふ始末だ。牢の中へ入れても、そいつ、水が飲みたいから柄杓に入れて来てくれと頼むので、その通りにもしてやると、いきなり柄杓の中へ潜り込んで、影も形も見えなくなる。鎖で縛つても、そいつがほんと手を叩くと、そのまゝ、ばらりと解けちまふ。まあ、こんな風にして、そのトリーシカは方々の村や町を歩き廻るのさ。このトリーシカは悪智恵のある奴で、基督信者の連中をいくらかも胡麻化しやがる……でも、こつちからはどうする事も出来ないんだよ……本當に、それこそ悪智恵のある凄い奴だからな。」

「まあ、さういつたわけで、」とバーエルは、持ち前のゆつたりした聲で話し續けた。「そんな奴なんだよ。つまりこいつを俺達の村で待つてたのさ。年寄り達は、それ、いまにお天道さまのお前兆が始まるが早いから、すぐにトリーシカがやつて来るぞ、と云ひ云ひしたものだ、そのうちに、いよいよお前兆が始まつた。村中の者はみんな、通りだの畑だのへ飛び出して、どうなるかと待つてみたんだ。俺たちの村は、みんなも知つてゐる通り、見晴らしのいい、廣々としたところだからな。かうしてみんなが見てゐると、ひよつこり大村の方から、なんだか變な男が坂道を下りて来るぢやないか。とても凄いい頭をした奴なんだ……みんなはいきなり「さあ、トリーシカがやつて来た！ さあ、ト

リーシカがやつて来た！」と喚いて、てんでに思ひ思ひの方に逃げ出したものだ！ 百姓頭は溝の中へ這ひ込むし、百姓頭の女房は門の下でまごころしちまつて、金切り聲で怒鳴り立てたもんだから、自分の家の飼ひ犬を吃驚させちやつたのさ。犬は鎖を切つて、編み垣を飛び越したと思ふと、林の方へ逃げ出しちまつた。クジカの親父のドロフェーイッチは、燕麦畑の中へ駆け込んで、そこに尻餅をついたまゝ、鶉の鳴くやうな聲を出して、「よしんば人殺しの悪黨でも、鳥くらゐは見逃がしてくれさうなもんだに。」と泣き出す始末だ。こんな風で、みんなの騒ぎといつたら大したものだつたぜ——ところが、その男は村の桶屋のワヴィラだつたのさ。新らしい壺を買つたもんだから、空の壺を頭に被つてゐたんだよ。」

子供らはみんなどつと笑ひ出した。やがて、野天で話してゐる人にはよくある事だが、また少しの間壁が途切れた。私はあたりを見廻した。王者の如く莊重な夜が四邊を鎮してゐる。初夜の露を帯びた涼氣は、夜半の乾いた温みに變つた。この温みはまだ暫らくの間、眠りに沈んでゐる野原の上には、柔かい帳のやうに垂れかゝつてゐることだらう。黎明の最初の騒ぎが聞こえ、朝の露が下り初めるまでにはまだ大分間があつた。月影は空に見えない。その頃は月の出が遅かつたのである。數限りない金の星は、競つて隣り交はしながら、揃つて靜かに、銀河の方へ流れて行くやうに思は

「ぢや、お前はそれを見た事があるかい、森の主を？」とフェーチャが茶化すやうに遮つた。

「いんや、見た事なんか無いよ。それに、見てたまるもんか。でも、他の人は見たつて云ふぜ。ついでこの間も、村の百姓が奴に引き廻されたよ。森中をさんく引つぱり廻されて、しかも始終同じ森の草つ原のまはりばかり歩かされたのだ……東が白む頃にやつと家へ歸れたとよ。」

「ふん、それぢや、その百姓は森の主を見たんだな？」

「見たとも。なんでも恐ろしく大かい、大かい恰好で仁王立ちになつて、顔も身體もどす黒くてさ、まるで木の蔭にでもなつてるやうにもしやくして、よく見分けられないんだとよ。お月様がさ、ないやうに身を隠して、大きな圓栗眼でじろくくと見つめてな、おまけにその眼を、ばちくりばかりさせるんだつて……」

「止せよ、お前！」フェーチャは軽く身懐ひして、肩をゆすりながら叫んだ。「ちえつ！」

「一體なんだつて、そんな汚れたものが世の中に擴がつて行つたんだらう？」とバーエルが云つた。

「ほんとに！」

「悪口つくでないよ。うっかりすると聞かれるぜ。」とイリヤーが注意した。

*イリエーシャ(愛蔵)の本文。 脚書

また沈黙が變つた。

「あれ見ろよ、みんな、あれ見ろよ。」不意に、ワーニヤの子供らしい聲が響いた。「あのお屋敷を見ろよ——まるで蜜蜂がたかつてるみたいだ！」

少年は清々しい顔を席の下から覗けて、小さな拳で頬杖をつき、大きな濃順しさうな眼を靜かに上へむけた。子供たちの眼は一齊に空へ注がれて、頬には伏せられなかつた。

「どうだい、ワーニヤ。」とフェーチャが優しく云ひ出した。「お前の姉さんのアニエートカはどうした、丈夫かい？」

「丈夫だよ。」とワーニヤは少し聲を鼻にかけながら答へた。

「お前、さう云つてくれないか、なぜ俺たちの方へ遊びに来ないのかつて？」

「知らない。」

「遊びに来いつて、姉さんにさう云つてくれろよ。」

「あゝ。」

「俺がい、物をやるからつて、さう云つてな。」

「俺にやくれないのか？」

「お前にもやるさ。」

ワーニャはほつと溜め息を吐いた。

「でも、いゝや、俺（おれ）はいい。それよか、姉さんにやつてくれ。姉さんは本當にいい人なんだもの。」
かう云つて、ワーニャはまた頭を地べたにつけた。パーエルは立ち上がつて、空になつた鍋を手にとつた。

「お前、どこへ行くんだい？」とフェーヂャが訊ねた。

「川へ行くんだ、水を汲みによ。水が飲みたくなつた。」

二匹の犬は起き上がつて、その後からついて行つた。

「氣をつけろよ、川へ落ちないやうに！」とイリュエーシヤが後から聲をかけた。

「なんで落ちるもんか！」とフェーヂャが云つた。「あれは用心する性質だから。」

「そりや、用心するだらうさ。でも、いろんな事があるからな。うっかり屈んで、水を汲まうとする拍子に、川の主（かみ）が手を掴まへて、水ん中へ引つ張り込むかも知れないよ。後（あ）でみんなが、可哀（あ）さうに川の中へ落つこちた……と云ひ出すが、なんの、落つこちたんぢやない！……ほーら、葦の中へもぐり込んだよ。」と彼は耳を傾けながら云ひ足した。

さう云へば本當に、葦が押し分けられて、この地方の言葉に従へば、「がさこそ」と音を立てたのである。

「ときに、ありや本當かな。」とコスチャが訊ねた。「馬鹿のアクリーナの氣が違つたのは、水ん中に落つこちてからだつてのは？」

「あゝ、あの時からよ……今はまあなんて態（たい）だ！でも、もとは別嬪（べっぴん）だつたさうぢやないか。あれも水の主に變（か）にされたんだよ。大方（おほほう）川の主（かみ）めは、あんなに早くアクリーナが助け出されようなんて、思ひがけなかつたに違ひない。あれはきつと水の底の巢（ね）の中で、アクリーナの氣を變にしたに違ひない。」

（私もこのアクリーナに何度も出會つた事がある。ほろ／＼の着物を身にまとひ、恐ろしく瘦せ細つて、炭のやうに眞つ黒な顔色になり、濁つた眼付きをして、いつも齒をむき出しながら、どこか道の眞ん中で、骨ばつた両手を胸にしつかりと押し當て、檻の中の野獸のやうに、のろ／＼と左右に身體を揺りながら、幾時間も幾時間も一つとところで足踏みをしてゐる。この女は何を云はれても一向わからないで、時々ひつ吊つたやうに高笑ひをするばかりである。）

「みんなの話だと、」コスチャが言葉を續けた。「アクリーナが川へ身投げをしたのは、色男に瞞（まど）され

「だからだつてな。」

「ほんとにそのせゐなんだよ。」

「ぢや、グーシヤを覚えてるかい？」とコスチャは、しんみりした聲で云ひ足した。

「どのグーシヤだい？」とフェーチャが訊ねる。

「ほら、あの土左衛門になつたのさ。」とコスチャは答へた。やつぱりこの川でよ。本當に可愛い子だつてがーあゝ、とても可愛い子だつたがなあーお袋のフェクリスタなんか、どんなにあの子を、グーシヤを可愛がつてたか知れないよーフェクリスタはあの子が水で死ぬつて事を、蟲の知らせで知つてたらしいぜ。夏なんか、グーシヤが俺たち子供仲間と一緒に、川へ水遊びに行かうとすると、慄へ上がつて心配したもんだよ、ほかのお袋たちは平氣なもんで、鹽を持つて傍を通りがかつても、暢氣らしく尻をふつて歩いてゐるのに、フェクリスタは鹽を地べたにおいて、歸つておくれ、うちの大事な坊や、歸つておくれ！おゝ、本當に歸つておくれ、可愛い坊やー」と呼び立てたもんだ。一體どうして落つこちたのか、まるで分らないんだ。川つぶちで遊んで、お袋も直ぐその邊で乾草を掻いてゐたんだが、ひよいと氣がつくと、誰か水の中で泡を吹いてゐるやうな音がするので、見ると、もうグーシヤの帽子ばかりが水の上に浮いてゐるぢやないか、さあ、それ

からといふもの、フェクリスタは氣が變になつちまつたんだ。川つぶちへ行つては、グーシヤの落つこちた所に臥るんだ。臥て歌を唄ひ出すのさ。――覚えてるだらう、グーシヤがいつもあんな歌を唄つてゐたぢやないか。あの歌をフェクリスタも唄ひながら、泣いて泣いて、さも辛さうに神様に口籠き立てるのだ……」

「あゝ、ほら、バヴルーシヤが歸つて來た。」とフェーチャが云つた。

「パーエルは水を一杯入れた鍋を手にして、焚火の傍へ寄つて來た。」

「おい、みんな、」彼は暫らく黙つてゐてから、かう口を切つた。「なんだか變だぜ。」

「なんだい？」とコスチャがせき込んで訊ねた。

「グーシヤの聲が聞こえたんだ。」

「みんなは一齊に身慄ひした。」

「何を云ふんだ、お前、何を云ふんだ！」と、コスチャが舌を縫らせながら云つた。

「本當だよ。おれが屈んで水を掬はうとすると、だしぬけにグーシヤの聲で俺を呼ぶのが聞こえるんだ。まるで水の中から、バヴルーシヤ、おい、バヴルーシヤ、こつちへお出で。」と云ふやうなんだよ。おら飛び退いたが、それでも水だけは汲んだよ。」

「わあ、くはばら、くはばら！」と子供らは十字を切りながら云つた。

「それはな、バーエル、川の主がお前を呼んだんだよ。」とフェーチャが附け足した。「俺たちはたつた今、あの子のことを、グーシャのことを云つたとこなんだもの。」

「あ、こいつあ悪い兆せだ。」とイリュエーシャが句と句を切りながら云つた。

「なあに、大丈夫だ、構ふもんかー」とバーエルはきつぱりした調子で云つて、また腰を下ろした。「どうせ約束ごとなら遁れつこないんだから。」

子供らは鳴りを静めた。見たところ、バーエルの言葉がみんなに深い感銘を與へたらしい。彼等は寢支度でもするやうに、焚き火の前で横になり始めた。

「ありやなんだ？」不意にコスチャが頭を持ち上げて、かう訊ねた。

「バーエルは耳を澄ました。」

「ありや山鷓ヤマシロが飛びながら鳴いてるんだ。」

「どこへ飛んで行くだらう？」

「なんでも、冬のない國へ向けて行くんだつてよ。」

「一體そんな國があるのかい。」

「あるとも。」

「遠いかな？」

「遠い、遠い、暖い海の方かうだよ。」

コスチャはほつと溜め息を吐いて、眼を閉ぢた。

私が子供たちの仲間に入つてからも三時間以上たつた。月は漸く昇つたけれども、すぐには眼につかなかつた。餘り小さくて細かつたからである。この覺束ない月の夜は、今までも劣らずやはり素晴らしい感じがした……けれど、つい先き程まで空高く輝いてゐた多くの星が、もう暗い地平に近く傾いた。あたりのものは何も彼も、いつも隣近くにのみ見られるやうに閑ひまとして静まり返つた。萬物は夜明け前の深い静かな眠りに沈んでゐる。空気はもう左程つよく匂はなくつて——また濕氣が擴がつてゆくやうに思はれた……夏の夜の明けやすさ……子供らの夜語りは……焚火と共に消えてゆく……犬までも假まごころ睡み始めた。微かに流れる弱々しい星あかりに見透かされたところでは、馬も首をたれ、身を横たへてゐるらしい……ともすれば前後を忘れさうなうつとりした氣持ちが襲つて来て、それがいつしか轉ま寢ねに變はつてゆく。

爽やかな風が顔を撫でた。私は眼を開けた——朝の氣配けいはいが感じられる。まだ空のどこにも紅くはばらは

さしてゐなかつたが、もう東の方は白みかけてゐる。四邊はほうとしてゐるけれど、一つ一つのものがそれと見分けられた。淡い灰色の空が次第に明るみ、冷えてゆき、青味を帯びて来る。星は弱々しく瞬いたり、姿を消したりしてゐる。大地はしつとりとして、木の葉は汗ばみ、そこそこ、に活き物の聲や響きが聞こえて来た。淡い風の微風がもう地上をさまよつたり、飛びめぐつたりし始めた。私の身體は軽く楽しい身慄ひでそれに應へる。私は身早く起き上がつて、子供たちの方へ行つた。子供たちはとろ／＼と燃え残る焚き火のまはりで、死んだやうに眠つてゐた。たゞパーエルだけが半ば身を起こして、ちつと私をみつめた。

私は彼に一つ願ひてみせて、水気を立て初めた川滑ひに、我が家をさして歩き始めた。まだ二里と行かないうちに、もう私の周圍には、廣い濡れた草野にも、前の方に現はれて来た緑色の丘にも、森から森へも、後の方に蜿蜒と続く埃道にも、朱に染まつて輝く藪にも、薄れゆく霧の間からも、恥づかしさうに青い色を見せた川にも――初めは猩々緋、次には赤と金の若々しい燃えるやうな光り、奔流のやうにふり注いだ……何も彼もが動き出し、眼をさまし、歌ひ、ざわめき、囁きはじめた。大粒な露の雫が、輝くダイヤモンドのやうに、そこにもここにも燃え立つた。やはり朝の涼氣に洗はれたやうな、清らかに澄んだ鐘の音が、私の行く手から流れて来た。突然、充分に休息を

取つた馬の群れが、顔馴染みの子供らに追はれながら、まつしぐらに傍を走り抜けた……

残念ながら、一つ云ひ添へなければならぬ事がある。その年、パーエルが亡くなつた。濡れたのではなく、馬から墜ちて死んだのである。氣持のいい、若者であつたのに、可哀さうなことをした……

……

クラシーワヤ・メーチのカシヤン

私はがた／＼の百姓馬車に乗つて、獵から歸つてゐた。夏の日にあり勝ちな曇り日の息苦しい暑さに（御承知の通り、かういつた日の暑さといふものは、晴れた日よりも、どうかすると餘計たまらない。風のない時などは尙更である）、私はへと／＼になつてしまつた。乾き切つて、ぎい／＼軌轍に掘られた道の土が、細かい白い埃となつて絶えず舞ひ上がるのを、身體ぢう浴びるに任せ、いやな気持ちでちつと我慢しながら、うと／＼と夢心地で揺られて行つた。——と、不意に、今まで私よりも本式に居眠りをしてゐた馭者が、容易ならぬ不安げな様子で、もぞ／＼と落ちつかぬやうに身を動かしたので、私は少し気持ちがはつきりして來た。馭者は手綱を引いて、馭者臺の上であたふたしながら、のべつどこか脇の方を眺めては、馬を嗷鳴り始めた。私は四邊を見廻した。馬車は折から廣々とした耕地を通つてゐたのである。同じやうに残る隈なく耕された低い丘が、ごく緩い傾斜をして、波のやうにうねりながら、四方からこの平地へ裾を曳いてゐた。僅か五露里ばかりのがらんとした野原が、目路を限つてゐるのであつた。はるかに見える小さな白樺の林だけが、

まるみを帯びた鋸の齒のやうな梢を連ねて、殆ど直線になつた地平線の統一を亂してゐる。幾つかの細い小徑が野づらを走つて、窪みにかくれたり、丘をうねつたりしてゐる。五百歩ばかり先きで、私たちの行く手を横切つてゐる小徑の一つに、何か行列のやうなものが見分けられた。私の馭者が眼をつけてゐたのも、これなのである。

それは葬式の行列であつた。先頭に立つた一頭立ての百姓馬車には、一人の僧が乗つて、そろそろと馬を進めてゐる。その傍には伴僧が腰かけて、手綱を取つてゐる。馬車の後からは、素頭の百姓が四人で、白い布に包んだ棺を擔ぎ、棺の後からは二人の女がついて來る。女の一人が立てる細い悲しげな聲が、私の耳まで傳はつて來た。耳をすまして聞くと、泣きながら歌ふやうにかき口説いてゐるのであつた。潮のさし退きするやうに單調な、やるせない悲しみを帯びた歌聲は、荒涼とした野づらに怫びしく擴がつて行く。馭者は馬に鞭をあてた。この行列の先を越さうと思つたのである。途中で死人に出逢ふのは、縁起が悪いとされてゐるからで。馭者は首尾よく棺が道へ出るまでに、そこを駆け抜けてしまつたが、まだ百歩と行かないうちに、思ひがけなく、私の乗つてゐる馬車が、ぐんと揺れて一方に傾き、危くひっくり返らないばかりになつた。馭者は勢ひづいた馬を引き止めて、まよよ、といつたやうに片手を一振りし、べつと唾を吐いた。

「どうしたんだね？」と私は訊ねた。

「馭者は返事もしないで、悠々と馬車からおりて行つた。」

「一體どうしたんだい？」

「心棒が折れたんでございます……焼け切れたんで。」と馭者は不機嫌さうに答へて、さも癪でたまらないとでもいふやうに、だしぬけに脇馬の尻帯をぐいと直したので、馬は横倒しになりさうな程よろ／＼つとなつたが、それでも持ち耐へて、鼻を一つ鳴らし、ぶるつと身慄ひした後、悠々と前足の膝の下あたりを曲で掻き始めた。

私も車をおりて、暫らくの間、不愉快な得體の知れない気持ちに漠然と浸りながら、路上に佇んでゐた。右側の輪は殆どすつかり車の下敷きになつてしまひ、聲に立てぬ絶望の表情で、轂を一生懸命に持ち上げてゐるやうに思はれた。

「さて、どうしたらいいだらう？」と到頭、私はかう訊ねた。

「あれ、あいつが悪いんです！」もう街道へ入つて、私たちの方へ近附いて来る行列を鞭で指さしながら、馭者は云つた。「何時も氣をつけてゐますが、」と彼は言葉を續けた。「ありや、確かに驗が悪いですよ——途中で死人に出くはすのは……さうですがすとも。」

かう云ひながら、彼はまた脇馬に八つ當たりをした。親方が不機嫌で難かしい顔をしてゐるのを見た馬は、ちつと身動きもしない事に腹を決めて、たゞ時々、まじやかに尾を振つてゐたのである。私は暫らくその邊をあちこちして、また車輪の前に足を止めた。

その間に葬列は私たちに追ひついた。そつと街道を外れて、道ばたの草の上に避けた佗びしげな行列は、私たちの馬車の傍を練つて行つた。私も馭者も帽子をぬいで、僧に會經をし、棺かつぎの人夫たちと目を見交はした。彼等はさも重さうに、やつとの事で足を踏み出し、廣い胸を高く波打たせてゐた。棺に従つてゐる二人の女のうち、一人の方は随分の年寄りで、蒼い顔をしてゐた。悲しみに打ちひしがれて醜くなつたまゝ、ちつと凍つたやうに動かないその顔の輪廓は、嚴めしく莊重な物々しい表情を失はないでゐた。瘦せ細つた手を時をり落ちこんだ薄い唇に當てながら、黙々として歩いてゐる。もう一人の女はまだ若くて、三十四五かと思はれたが、眼を赤く泣きぬらして、顔中が涙にむくんでゐた。私たちの傍まで来たとき、女は聲高にかき口説くのを止めて、顔を袖で隠してしまつた……けれど、やがて棺が私たちの傍を通り抜けて、また道へ出たとき、魂をかき拂ふやうな、物悲しい歌聲が、またもや耳に入つて來た。規則正しく揺れてゐる棺を黙つて見送つた後、馭者は私の方へふり向いた。

「あれは大工のマルチインの葬式なんで。」と彼は口を切つた。「あのリヤバヤ村の。」

「どうしてそれを知つてる？」

「あの女どもで分かりましたよ。年取つた方がお袋で、若い方が女房なので。」

「病気で、もあつたのかい？」

「さやう……痛を患ひましてね……一昨日支配人の方が醫者を迎へにやられましたけど、あいにくと醫者が留守でした……なか／＼い、大工で、少しは酒も飲みましたけれど、腕の出来た大工でございましたよ。まあ、女房の辛がつてる事はどうでせう……でも、それも別に不思議のない事で、女の涙は金を出して買ったものぢやないと云ひますからな、女の涙は水も同然でございますよ……さうですとも。」

かう云つて、馱者は身を屈め、脇馬の手綱の下をくゞつて、両手で軛を掴まへた。

「それにしても、」と私は云つた。「どうしたものだらう？」

馱者は先づ膝で中馬の肩を抑へ、二度ばかり軛をゆすぶつて、鞍敷きを直した後、また脇馬の手綱の下をくゞり抜け、行きがけの駄賃に、鼻面へ一つ突きを喰らはして、車輪の傍へ寄つた——傍へ寄つて、車輪から眼を離さずに、長上衣の裾をまくり上げ、木の皮作りの煙草入れを悠々と取り

出し、悠々と皮紐を掴んで蓋をあけ、同じく悠々と太い二本指を煙草入れに突つ込んで（その二本指も、やつと入る位であつた）、暫らく喫ぎ煙草をもみほぐし、前から手廻しよく鼻を歪め、何度にも區切りながら粉を吸ひ込み、その度に長い呻き聲を出した。そして、涙の滲んだ眼を痛々しげに細めて、ばち／＼と瞬きながら、深い物思ひに沈んだものである。

「おい、どうした？」私は到頭かう云つた。

馱者は、さも大事さうに煙草入れをかくしに納め、手を使はずに頭を動かしただけで、帽子を肩の上まですり下がらせた後、考へ深さうに馱者臺へ上がつた。

「どこへ行かうと云ふんだい？」と私は多少びつくり氣味で訊ねた。

「どうかお乗んなすつて。」と彼は落ちつき拂つて答へながら、手綱を捌いた。

「一體どうして車を出すんだね？」

「とにかく、出してお目にかけますよ。」

「でも、心棒が……」

「まあ、お乗んなすつて。」

「でも、心棒が折れてるぢやないか……」

「折れるにや折れましたが、なに、出村まではどうにか行き差かせませう……その、ほち／＼とね。すぐその森を出はづれると、右側に出村がありますよ、ユーヂェイと申しましてね。」

「お前、無事に行き着けると思ふのかい？」

「取者は、返事をする値打ちもないといふやうに、黙つてゐた。」

「俺はいつそ歩いて行くよ。」と私は云つた。

「どうともお氣に召したやうに……」

「取者は鞭を一振りした。馬は歩き出した。」

右の車輪がやつと離れずに保つてゐて、まことに奇妙な廻り方をしてゐたけれど、とにかく出村まで通りついた。とある小山にかゝつた時には、危く輪が滑し飛びさうになつたけれど、取者が凄しい聲で怒鳴つたので、どうやら無事に下りることが出来た。

ユーヂェイの出村は、建ててからまだ間がないらしいのに、もう横に傾いでしまつた六軒の低い小さな百姓家の集まりであつた。中には、背戸に編み垣をめぐらしてゐない家もあつた。私たちはこの出村に乗り込んだけれど、人つ子ひとりにも出會はさなかつた。往來には雞一羽、犬一匹も見當たらぬ。たゞ一匹だけ、尻尾を短く切られた黒い犬が、私たちの姿を見ると、から／＼に乾い

た飼槽の中から慌だしく飛び出した。おそらく喉が渴くので、その中へ潜り込んだに相違ない。犬は吠えようとしないうで、まつしぐらに門の下へ駆け込んでしまつた。私はとつ／＼の家へ行つて、入り口を開け、主人に聲をかけたが——誰も答へるものがない。私はもう一度呼んでみた。すると、猫がひもじさうに、やおと啼く聲が、戸の向かうで聞こえた。足で戸を一蹴りすると、痩せ猫が青い眼を暗闇の中にぎよろつかせながら、傍をこそ／＼と摺りぬけた。私は部屋の中へ首を突つ込んで、様子を観つた。中は暗く、煙つほく、がらんとしてゐる。背戸へ行つてみたが、そこにも誰一人ゐない……圍ひの中で懐が一匹ないてゐる。灰色をした斑の鷺鳥がひよ／＼と少しわきの方へ逃げた。私は二軒目の家へ行つてみたが——二軒目の家にも人の氣配もしない。背戸へ廻つてみる……

陽のまぶしく照つてゐる庭のまん中、俗にいふ「かん／＼照り」の日向で、顔を地べたへ押しつけ、百姓外套を頭から被つて臥してゐるものがある。私の目には男の子らしく思はれた。そこから五六歩はなれた藁葺の片庇の下に、ほろ／＼の馬具をつけた痩せ馬が、見すほらしい荷馬車のそばに立つてゐる。日光が古ほけた屋根の細い破れ目から瀧のやうに流れ込みながら、馬のもじや／＼した赤茶色の毛に、細かい光りの斑紋を面白く印してゐる。すぐそばにある高い鳥の窠箱では、掠鳥

どもが虚空の樓家から落ちつき拂つた好奇の眼付きで下を見おろしてゐる。私は寝てゐる男のところにへ行つて、起こしにかゝつた……

男は頭を持ち上げて、見ると、すぐにばつと立ち上がった……「なに、なんの御用で？ 一體なにごとなんぞ？」彼は半ば寝ほけたまゝで呟いた。

私はすぐには返事が出来なかつた。それ程までに、私は相手の風體に一驚を吃したのである。年の頃は五十そこそこ、小さな薄黒い皺だらけの顔に、尖つた鼻をして、やつと見えるくらゐな蒼色の目をつけ、縮れた厚い眞つ黒の髪が茸の笠よろしく、小さな頭の上に大きく被さつてゐる侏儒——かういふ人間を想像してみたい。體ぜんたいは羸弱さうに瘠せてゐて、しかも眼ざしの眩みはづれて奇妙なことといつたら、それこそ言葉に傳へることが出来ないほどである。

「なに御用ですな？」と男はもう一度たづねた。

私は事情をよく話した。彼はゆつくりゆつくり睡きしながら、私から目を放さずにちつと聞いてゐた。

「かういふ譯なんだが、新らしい心棒を手に入れることは出来まいか？」と、最後に私はかう云つた。「代は文句なしに拂ふがね。」

「お前さんは一體どういふお人なんぞ？ 獵でもなさる方かね？」彼は先づ、私の頭から足の爪先ままでじろりと見廻して、かう訊ねた。

「獵をやる者だ。」

「大方、罪のない空飛ぶ鳥を撃ちなさるんでせう？……森の獣だの？……神様のお造りなされた鳥を殺したり、罪もないものの血を流したりして、悪い事とは思ひなさりませんか？」

奇妙な爺さんは、やたらに言葉を引きながら口をきいた。その聲の響きも、やはり私を驚かした。老いほれたところが少しもないばかりか、びつくりするほど氣持ちがよく、若々しく、殆ど女のやうに優しい聲音であつた。

「俺んここにや心棒はごせえませんか。」暫らく黙つてゐた後、彼はかう云ひ添へた。「あんなのぢや役に立たんでせうし（彼は自分の馬車を指さした）、あんなのはきつと大きな車でせうからな。」

「この村で手に入るだらうか？」

「こんな所を村だなんて……こゝぢや誰も持つてる者はをりませんよ……第一、誰も家にゐる者がなくらゐるで、みんな仕事に出て居りますでな。さあ、歸つて貰えませう。」と彼はだしぬけに云ひ切つて、また地べたへごろりと横になつた。

私はかういふ結末をまるで豫期してゐなかつたのである。

「ねえ爺さん、」相手の肩に軽く手をかけながら、私は云ひ出した。「お願いだから、一肌ぬいでくれないか。」

「さつさと行つて貰えませう！ 俺はくたびれてるんで。町へ行つて来たもんだから。」と、彼は云つて、百姓外套を頭から引つ被つた。

「まあさう云はないで、なんとかかしてくれよ。」と私は言葉を續けた。「私は……私はお禮をするから、」

「お前さんに禮なんか貰ひたくないよ。」

「まあ後生だから、爺さん……」

彼は半ば身を起こして、細い足を組みながら坐り直した。

「なら、森の中の伐り出し場にも連れて行くかな。あすこの森を商人どもが買つて——天罰が恐ろしくねえか、森を伐り倒して、事務所なんか建てやがつた、本當に天罰を恐れねえ奴等だ。お前さん、そこへ行つて眺へるなり、出来合ひを買ふなりしなすつたらいい。」

「結構だ！」と私は嬉しさに叫んだ。「結構！……さあ行かう。」

「標の木の心棒のいゝやつをなあ。」と彼は起き上がりもせず、また言葉を續ける。

「その伐り出し場までは遠いかね？」

「三裏だ。」

「いや、仕方がない！ お前の馬車に乗つて行けるわけだらう！」

「うん、でも……」

「さあ、おかけよう。」と私は云つた。「出かけよう、爺さん！ 馱者が往來で待つてゐるんだから。」

老人は膝々立ち上がつて、私の後について往來に出た。馱者は苛々した気分になつてゐた。馬に水を飲ませようとしたところが、井戸の水がおそろしく少くて、味がよくなかつたのである。馱者連に云はせれば、水が何より一番大切な事なのである……けれども、老人の姿を見ると、馱者はにやりと齒をむき、頷きながら叫んだ。

「やあ、カシヤーマシカ！ 今日（こんにち）は！」

「今日は、正直者のエロフェイ！」とカシヤンは精のない聲で答へた。

私は早速、老人の申し出を馱者に傳へた。エロフェイはそれに賛成して、背戸へ馬車を乗り入れた。馱者が手順を考へながら、まめくしく馬を車から外してゐる間、老人は内に凭れかゝつて、浮かぬ様子で馱者と私を見比べてゐた。彼はなんだか腑に落ちない様子で、見受けたところ、私た

ちが不意に押しかけたのを餘り嬉しく思つてゐないらしかつた。

「一體、お前も居場所を變へられたのかい？」とエロフェイは鞭を外しながら、出しぬけに訊ねた。

「さうよ。」

「へえ！」と馱者は齒の間から押し出すやうに云つた。「ときに、大工のマルティンが……お前はリヤバヤ村のマルティンを知つてゐるだらう？」

「知つてるよ。」

「ところで、あいつが死んだんだぜ。俺あ今あれの棺に出會はしたんだ。」

カシヤンはびくりと身を慄はした。

「死んだつて？」と彼は云つて、目を伏せた。

「あゝ、死んだんだ。何だつてお前、ちやんと癒してやらなかつたんだい、え？ だつて、お前は病氣の療治をするつて話ぢやないか、醫者さんださうぢやないか？」

馱者は明らかに老人をからかつて、面白がつてゐるのである。

「ところで、これがお前の車なのかい？」と肩を曲けて、車の方をさしながら、彼はかう云ひ足した。

「あゝ、俺のよ。」

「ふん、車か……これが車か！」と彼は繰り返して、轆を掴むと、殆ど車を引つくり返さないばかりにした……。「これが車かい！……だが、一體なにに曳かして伐り出し場まで行くつもりだ？……」の轆にや家の馬は駕けられやしないぜ。家の馬は大かいんだからな、ところが、この轆はなんて態だ？」

「分かんねえな、」とカシヤンは答へた。「何に曳かして行きなざるかね。まあ、ほれ、あの畜生にでも曳かせなけりや仕方がねえだらう。」と、彼は溜め息と共に附け足した。

「こいつに？」とエロフェイは引き取つた、そして、カシヤンのやくざ馬の傍へ寄つて、さも馬鹿にしたやうに中指で馬の頸を突いた。「ちえつ、」と彼は、たしなめるやうに云ひ足した。「寝てやがら、間抜け野郎め！」

私はエロフェイに早く馬車の用意を頼んだ。私は自分でカシヤンと一緒に伐り出し場へ行つて見たくなつたのである。そんな所にはよく松雞があるものだ。もうすつかり馬車の用意が出来た。私が犬をつれて、どうにかかうにか、板の振り返つた車の底に尻を落ちつけ、カシヤンがすつかり一と縮みになつて、相變はらず浮かぬ顔つきで、同じく前の横木に腰を下ろした時——エロフェイが私の傍へやつて、さも秘密めかしい様子で囁いた。

「とにかく旦那さま、御一緒にお出かけになつてよろしうございました。でも、あいつは何分その、神がかりみたいな奴やつでしてな、綽名を「蚤」つて申しますんで。どうして旦那に、あいつの云ふことがお分かりになつたか、それが不思議なくらゐで……」

私はエロフェイに向かつて、今までのところ、カシヤンは中々分別のしつかりした男のやうに思はれると云はうとしたが、取者はまた同じ調子で言葉を續けた。

「でも、お氣をおつけなさいまし、あいつ、ちゃんと間違ひな、御案内しますかどうかね。それに、心棒も御自分でお選りになるがよろしうございます。なるべく頑丈さうなのをお取んなさいまし……ときにどうだね、蚤公、」と彼は聲を大きくして附け足した。「どうだね、お前んとこで廻廻きれにでもありつけないかね？」

「捜してみるがい、。めつかるかも知れねえ。」とカシヤンは答へて、手綱を一つしやくつた。かうして私たちは乗り出して行つた。

私の心から吃驚したことだけれど、カシヤンの馬はなか／＼よく走つた。彼は道々ずつと頑固に沈黙を守つて、私がちよい／＼問ひかけても、ぶつきら棒な調子で濼々返事をするばかりであつた。やがて間もなく伐り出し場へ乗りつけ、それからやつ／＼とこさで事務所まで辿り着いた。それは、急

場の間に合はせに土堤をめぐらして池の形にしてある小さな谷の上に、ほつんと一軒だけ建つてゐる高い小屋なので、この事務所の中には、齒が雪のやうに白く、甘つたるい眼付きで、甘つたるい臆面のない口の利き方をして、おまけに甘つたるい狡るさうなお世辭笑ひを振り撒く若い手代が二人控へてゐた。私はこれを相手に心棒の値段を決めて、伐り出し場の方へ足を向けた。カシヤンが馬の傍に付き添つてゐて、私の歸りを待つてゐる事と思つたが、圓らずも彼は私の傍へやつて來た。「なんですかね、やはり、罪のない鳥どもを撃ちに行かつしやりますかね？」と、彼は云ひ出した。「え？」

「さうだよ、もし見つかつたら。」

「俺も一緒に歩いて行くかな……構はないかね？」

「構はないとも、構はないとも。」

そこで私たちは一緒に出かけた。——木を伐り拂つた場所は全部で一露里ばかりである。正直なところを云ふと、私は自分の犬よりもカシヤンの方に餘計眼をつけてゐた。これが蚤といふ綽名をつけられたのも、なるほど無理からぬ事と思はれた。何一つ冠つてゐない小さな黒い頭が（尤も、その髪の毛はどんな帽子の代はりにもなる位であつた）、目まぐるしいほど藪や灌木の間をちら／＼

しつづけた。彼は驚くばかり足が早くで、いつもひよい／＼跳び上がるやうな歩き方をした。のべつ屈み込んでは何かの草を摘み取り、それを懐へ入れてゐる。そして何やら口の中でぶつ／＼云ひながら、如何にも試験するやうな物好きな眼付きで、絶えず私と犬をじろ／＼眺めるのであつた。低い灌木の中や「下草もの」の間や伐り出し場などには、小さな灰色をした鳥がゐて、ひつきりなしに木から木へ飛び移り、飛び移りさまにふいと潜るやうな恰好をしながら、ちいちく啼き立ててゐる。カシヤンはその聲を真似て、小鳥どもと啼き交はすのであつた。若い鶉が一羽ちつ／＼と鳴きながら、すぐ彼の足許から飛び立つた——彼もそれに續けて、ちつ／＼鳴き真似をする。雲雀が羽を細かく慄はせて、朗かな歌聲を張り上げながら、彼の頭の上へ下りかけると、——カシヤンは又その歌を引き取るのであつた。私にはまるで話しかけようともしない……

天気は上々で、前よりもつとい、くらゐであつたが、暑さは一向に凌ぎよくはならなかつた。晴れ渡つた空には、消え残つた春の雪のやうに黄味を帯びた白雲が、下ろされた帆にその儘の平たい楕圓形をして、ところ／＼に高く浮かび、漸くそれと知られるくらゐに流れ動いてゐる。綿のやうにむくむくと軽やかに様々な面白い形を描き出してゐる雲の縁は、ごく緩やかではあるけれど、眼に見えて刻一刻と變はつて行つた。これらの雲は靜かに溶けて行つて、地上に影を落とさない。私

はカシヤンと二人で長いあひだ、伐り出し場を彷徨ひ歩いた。また三尺と伸びない藪が、ほつそりした滑らかな葉を連ねて、動すんだ低い切り株を取り巻いてゐる。鼠色の縁をした丸つこい海綿苔が——これを煮て火口にする——これらの切り株にびつしりくつ、いてゐる。野苺が薔薇色をした蔓を、その上に這はしてゐるし、すぐ傍には、茸が一家眷族ひと塊りになつて、窮屈さうに竝らんでゐる。足は焼けるやうな日光を思ふ存分吸ひ込んだ長い草に絡まり纏れる。どこを見ても、どきつい金属性の光を放つ赤味がかつた木の葉のために、眼がちらく／＼するやうな思ひであつた。どちらを向いても、野豌豆の空色をした穂や、金の盆に似た琉金花の可愛い花や、半ば紫で半ば黄色い三色堇が、友禰模様を擴げてゐる。ところ／＼赤く萎けた草の條で轍の跡を止めてゐる荒れ果てた小徑のほとりに、風雨に動すんだ薪が幾敷(七尺)も高く積み上げられてゐる。その歪んだ四角形が弱々しい影を投げてゐるばかり——他にはどこにも物の形らしいものもなかつた。軽いそよ風が目を覺ましては、また消えてしまふ。不意にまともに顔に當たつて、嬉々として戯れると——あらゆる物が愉し気にさんざめき、傾き始める。あたりが一面にざわ／＼と動き出して、しなやかな羊齒の葉先が翳々と揺れる——すると、自から心が愉しむ……けれど、さう思ふ間もなく又ばつたり風が落ちて、何も彼もがもとの靜寂にかへる。たゞ、蚊がまるで面當てのやうに、聲を揃へて鳴きた

てる。——この絶え間ない、酸っぱいやうな、乾き切った響きは、頭の芯を痺れさせるやうである。それは眞晝どきの執拗な暑さにふさはしい。それはかうした暑さから生まれ、赤熱した大地の中から呼び出されたもののやうである。

たゞの雛一羽にも行き當たらないうで、私たちはとうとう新らしい伐り出し場まで来てしまった。そこには近ごろ伐り倒されたばかりの泥楊が、草や小さな木を押しつけながら、佗びし氣に地面に長々と投げ出されてゐた。中には、まだ青みを帯びてゐるけれど水氣の切れた葉を、ちつと動かない枝から垂れてゐるものもあるし、また中には、葉がすつかり枯れて、干反つてゐるものもある。鮮やかな水々しい色をした切株の周りには、爽かな金色がかつた白い木つばが堆高く積つて、なんとも云へないほど氣持のいい、一種特別な苦味を帯びた香りを放散してゐる。はるか彼方の林に近いあたりでは、斧の音が鈍く響いて、時をり捲き毛の頭のやうに水々した梢が、宛ら両手を擴けて禮拜でもするやうに、嚴かに靜々と倒れて行く。

永い間、私はなんにも獲物が見つからなかつた。その中に到頭、苦蓬の一面に生え擴がつてゐるこんもりした若櫛の木立ちの中から、一羽の水鶏が飛び出した。私は火蓋を切つた。水鶏は空中にもんどり打つて落ちて來た。鐵砲の音を聞きつけたカシヤンは、いきなり片手で眼を蔽つて、私が

銃に装填をし直し、水鶏を拾ひ上げるまで、身じろぎもしなかつた。私がまた先きへ歩き出すと、彼は撃たれた鳥の落ちた所へ行つて、いくらか血の滴の散つてゐる草に身を屈め、頭をふつて、おづ／＼と私の方を見やつた……それから暫らくたつて、「罪だな……あ、これこそ本當に罪なことだ」と、呟く聲が私の耳に入つた。

たうたう暑さに辟易して、私たちは森に入つた。私は胡桃の高い繁みの蔭に飛びこんだ。その蔭みの上には、すらりとした若楓が軽やかな枝を美しく擴けてゐる。カシヤンは伐り倒された白樺の根がたに眼をおろした。私はその様子をちつと眺めてゐた。梢で木の葉が微かに揺れて、その淡い緑色の影が、黒っぽい百姓外套につ、まれた彼の羸弱さうな身體や、小さな顔の上を、靜かにあちこち滑つてゐる。彼は頭を上げようとしないう。相手が黙り込んでゐるのに辛氣くさくなつて、私は仰向きに引つくり返り、はるかに明るく擴がつた空を背景に、縫れ合つてゐる木の葉の和やかな戯れに見惚れ始めた。森の中で仰向けに寝そべりながら、空を眺めるのは素晴らしい愉快なものである！それはまるで底知れぬ海の中を覗いてゐるやうな氣持ち、海は廣々と足下に擴がつてゐるやうである。樹木は大地から上へ聳えてゐるのではなく、宛ら巨大な植物の根に似て、玻璃のやうに澄み切つた波の中へ垂直にたれてゐるやうに感じられ、木の葉はエメラルドかとはかり透いて見え

ると思へば、その緑が金色を帯びて、殆ど黝すんで見えるほど濃くなつて行く。どこか遠くの方に細い小枝が突き出てゐて、その先きに一枚の葉が、透き通るやうな碧瑠璃の空の一片に、そよともせず浮き出している。その傍にもう一枚の葉が、魚の鱗の戯れを思はせながらゆらいでゐる。その動きは風のためではなくて、おのづから動いてゐるとしか思はれない。まる／＼とした白雲が、水の底なる魔法の島のやうに靜かに浮かんで來ては、靜かに流れ去る——と思ふ間に、この海も、この輝かしい空気も、太陽の光りを浴びたこれらの枝も葉も、何も彼も、不意に波立ちはじめ、慌たしい光りを帯びて慄へ出す。すると、さながら微かに寄せて來た波のうねりの果てしないざわめきに似て、爽かな打ち慄へる啜きが起こる。身動きもせず眺めてゐると、心がどんなに喜ばしく、和やかに、甘美甘いしくなつて來るか、とても言葉では云ひつくせない。ちつと眺めてゐると、澄み切つた空の碧が、その色と同じやうに無心な微笑を唇に誘ふ。空ゆく雲と同じやうに、また雲の動きにつれられるやうに、一連の幸福な思ひ出が、靜かに心の中をよぎる。そして、隨は次第に遠く遠く去つて行つて、あの空らかな輝かしい深淵の中へ人を誘ひ入れ、その高い空から、その深い淵から、離れることが出來ないやうに思はれる……

「旦那、もし、旦那！」不意にカシヤンが例のよく響く聲で呼びかけた。

私ははつとして身を起こした。今まで私が問ひかけてもろく／＼返事しなかつた者が、今度は急に自分の方から話しかけるではないか。

「何の用だね？」と私は訊ねた。

「ねえ、なんだつてお前さん、鳥なんか殺したすつた？」ひたと私の顔をみつめながら、彼はかう云ひ出した。

「なんのためつて？……水鶏は獵の獲物で、食べられる鳥ぢやないか。」

「そんな事のために殺しなすつたのぢやねえでせう、旦那、お前さんがなんであんなもの食ひなされるもんかね！ たゞ楽しみに殺しなすつたんでがせう。」

「でも、お前だつて多分、早い話が、鶯鳥なり鶏なり食ふだらう？」

「そんなのは、神様が人間に決めて下さつた鳥だけれど、水鶏は森で自由に飛び廻つてゐる鳥だもんね。何も水鶏に限つた事ぢやない。まだほかにも、森の中だの、野つ原だの、川だの、沼だの、草つ原だの、高い所だの、低い所だのにゐる奴が幾らでもある……それを殺すなあ罪なこつた。壽命のあるうちは、勝手にこの世で生かしくがい……人間にや、ちやんとほかに食ひ物が決まつてゐる。人間の食ひ物や飲み物は別にありますよ。穀類など神様のお授けものだし、天から降る水も

あれば、大昔の先祖たちから傳はつて來てる飼ひならした獸もあるしな。」
 私は吃驚してカシヤンをみつめた。彼の言葉はすらくと淀みなく流れ出した、別に言葉を探すやうな事もなく、とき／＼眼を瞞ぎながら、静か感興と、慎ましやかな威厳を帯びた調子で話すのであつた。

「それぢや、お前に云はせれば、魚を殺すのも罪なんだね？」と私は問ひ返した。

「魚は冷たい血をしてまさあ。」と彼は如何にも確信あり氣に云ひ返した。「魚は鳴かない生きもんだからね。怖かない事も、嬉しい事も知らねえ。魚は口も利かなけりや、感じもねえ生き物で、身中の血だつて生きちやるませんや……血つてものは、彼は暫らく口を喋んでから、また言葉を續けた。「血は聖いもんだ！ 血は日の目を拜むことがねえ。血は明るみから隠れるやうに隠れるやうにしてゐるで……血を明るみへ出すのは大かい罪だ。それこそ大かい罪だ。恐ろしいこつた……ああ、たいそれたこつた！」

彼は溜め息を吐いて目を伏せた。正直に云ふと、私はすつかり度膽を抜かれて、この奇態な老人をみつめた。彼の云ふことには、百姓の言葉らしい響きが感じられなかつた。たゞの百姓にこんな話し方は出来ないし、村によくある口達者な連中の話し方ともちがふ。それは充分に考へ抜いた、

莊重な話しぶりで、しかも風變はりである……こんな話しぶりは、今までに聞いた事がない。

「カシヤン、一つ聞きたい事がある。」いくらか赤味を帯びて來た相手の顔から眼を離さないで、私はか／＼口を切つた。「お前は何を商賣にしてゐるね？」

彼は直ぐには私の問ひに答へなかつた。その眼はちよつと束の間、不安げにきよろ／＼と動いた。

「たゞ神様のお云ひつけ通り暮らしとりますよ。」と、彼は漸く口をきいた。「べつに商賣なんて——どうして、なんにも商賣なんかしちやるねえんで。餓鬼の時から、とても鈍な性質でね、かうして働ける間だけ働いちやるるけれど——その働きもろく／＼出來やしねえ……どうしてそんな事が！ 何せ達者な方でもなし、手も不器用でね。え、と、春になると、鶯を捕つてをりますがな。」

「鶯をとるつて……でもお前は、森や野つ原や、その他いろんな所に棲んでゐる生き物に觸つちや不可ないと、さう云つたぢやないか？」

「そりや殺すのはいけねえ、そりやその通りだ。さうでなくつても、生きてゐるものはみんな死ぬんだからね。早い話が、あの大工のマルティンだ。大工のマルティンはこの世に生きちやるたけれど、長生きもしねえで死んでつた。それで女房は今、亭主のことを思ひ出したり、小せえ餓鬼どものことを考へて、泣きの涙でゐるが……死神といふ奴ばかりは、人間にしても、畜生にしても、誤魔化

すわけにやゆかねえ。死神は別に黙けて来もしねえけど、こつちも逃げらわけにやゆかねえ。だから、死神に手を借すなあ要らざるこつた……俺あ鶯を殺しなんかしねえ——飛んでもねえ話だ！俺あ苛めたり、生命とつたりするために、鶯を捕まへるんぢやなくつて、人を喜ばすために捕るんだ、慰めたり、楽しませたりするためのよ。」

「お前はクルスクの方へ捕りに行くかね？」

「クルスクの方へも行くし、何かの拍子にやもつと遠くへも出掛けまさあ。沼地で夜を明かす事もあれば、森の奥の寂しい原っぱで、たつた一人寝ることもあるよ。そんな所ぢや鶯が啼いたり、兎が可愛い聲を立てたり、鴨がぎやあ／＼云つたり……俺あ晩に鶯の居所を見ておいてさ、夜明けに鳴き聲で見當をつけてから、東が白む頃に藪の上に網を張るんだ……鶯の中でも、本當に哀れつばい聲で啼くのがまさあ……い、聲で啼いて……可哀さうなくらゐだ。」

「で、それを賣るのかね？」

「親切な人に譲つてやりまさあ。」

「それから、まだほかに何をしてるね？」

「何をしてるつて？」

「何か仕事をしてゐるかといふのさ？」

老人はやゝ暫らく黙つてゐた。

「別にこれといつて仕事はしてゐねえ……俺あ仕事は下手な方でね。でも、読み書きは出来るんで。」

「お前、読み書きが出来るつて？」

「読み書きは出来るんですが。神様とそれから親切な人たちのおかげでね。」

「どうだね、お前、女房子はあるのかい？」

「いんや、ありません。」

「そりやどういふわけだ？……死に絶えたとしても云ふのかね？」

「いんや、ひとりでにさうなつたんで、廻り台はせが悪かつたんですが。それに、そんな事はみんな神様の思召し次第で、人間だれしも神様の御意のまゝに生きてゆくものですがよ。でも、人間は正直でなくちやならねえ——これが一番だ！つまり、神様のお心にまよやうにしなけりや。」

「お前には身内もないのかね？」

「あります……が……別にこれといふ……」

老人は言葉につまつた。

「ときに、どうだね。」と私は口を切つた。「さつきうちの敷者がお前を掴まへて、何故マルティンを癒してやらなかつたかと訊いてゐたやうだが、お前は一體病氣が癒せるのかい？」

「お前さんの敷者が、まづ、どうな人間だ。」とカシヤンは考へ深さうに答へた。「けれど、それでも悪い癖があるよ。俺のことを醫者さん、醫者さんと云つて擲擻ふが……俺が醫者だなんて飛んでもねえ……誰だつて病氣なんか癒せるものぢやねえや。そんな事はみんな神様の御心にあるでな。でも……病氣に効目のある草や花があるにやある。そりや本當にあるよ。ほら、例へば狼把草なんかも、人間にとつちや有難い草だ。それから車前草なんとも同じこつて、こんな草の話をするなあ恥ぢにならねえ。神様から授かつた、あらたかな草だからな。ところが、そのほかのやつは、どつこいさうはゆかねえ。効くにや効くけれど、不淨な草だ。そんなやつのお話をするのも罪になる位だ。でも、お祈りを唱へながら使へば、まあ……そりや、もう、淨めの言葉があるからな……とにかく、信仰を持つてゐる者は、助かりますで。」と彼は聲を低めて云ひ添へた。

「お前はマルティンに、これつて藥をやらなかつたのかい？」と私は訊ねた。

「聞いたのがもう遅かつたもんで。」と老人は答へた。「いや、そんなことを云つたつて始まらねえ！

みんなそれ／＼持つて生まれた約束事だからな。大工のマルティンは壽命がなかつたんでさ。」

この世の壽命がなかつたわけで、そりやもう仕方だねえこつてがすよ。いや、全くこの世の壽命のない人間は、お天道さまでも、他のものみてえに暖めちや下さらねえし、廻廻だつて身につかねえ——まるで、かう何かに招ばれてるやうなもんでがすよ……まあ、神様のお慈悲で、あれの魂の鎮まりますやうに！」

「お前はすつと前からこちらへ引つ越しさせられたのかね？」と、暫らく黙つてゐた後で、私はかう訊ねた。

カシヤンは、びくつと身を慄はした。

「いんや、つい近頃で、四年ばかり前の事ですが。大旦那の時にや、みんな昔ながらの所に暮らしてゐたもんだが、後見人が世話を見るやうになつてから、村を追ひ出されてしまったので。大旦那は温順しい靜かな方だつたがなあ——今ぢや天國に眠つておいでになる！でも、後見人だつて、理窟に叶つた裁きをつけたに相違ねえから、もうかうなるべき因縁だつたと見えませう。」

「以前、お前たちは何處にゐたんだね？」

「クラシーワヤ・メーチから越して参りましたんで。」

「それはこゝから遠いのかい？」

「百露里ばかりのところでがす。」

「どうだね、向かうの方がよかつたらうか？」

「そりやよかつた……よかつたどころぢやねえ。あつちは、廣々とした川沿ひの土地で、ほんたうにわし等の巢になつてゐたもんだが、こゝは窮屈で、かさ／＼に乾いて……こゝへ来てから、わし等は孤兒になつたやうな気がするくらゐだ。古巢のクラシーワヤ・メーチにゐた頃は、ちよつと丘へでも登つてみりや——それこそもう、なんとも云はれねえ！ ねえ……河もありや、草つ原もあるし、森もある。こつちの方に教會堂があるかと思へば、またその先きにや草つ原が續いてゐる。遠い遠いとこまで見渡せる。ほんたうに、うんと遠いとこまで一目だ……いくら眺めても、眺めても、全く飽きる事がねえ、ほんたうによ！ ところが、こゝは土地は確かに向かうより上等だ。粘り気があつて、百姓どもの云ふ上等の粘土で、俺の作物だつてどこでも、しこたま穫れるよ。」

「なにかね、爺さん、正直な話が、お前も生まれ故郷に行つてみたいだらうね？」

「そりや、一目見てえもんでがすよ。尤も、どこにゐたつて結構でさ。俺あ女房子のない人間だから、一つとところに落ちつかれねえ性分なんで。それにお前さん！ ながく家にばかり燻ぶつて居れるもんですかい！ ところがね、こんな風にどん／＼歩いて行くと……」彼は聲を高めて言葉を續

けた。「気が軽々として来る、本當でさ。お天道さまも照らして下さるし、神様のお目にも屈きよくなつて、歌もひとりでに調子がよくなつて来る。その邊を見ると、綺麗な草が生えてる。そこで、眼に入つたのをちぎつて取る。またこつちには、ものの例へが、泉の清水が流れてる、有難い聖水だ。そこでこれにも眼をつけて、腹いっぱい飲む。空には鳥どもが歌つて……話はちがふが、クルスタの向かうにや草原が續いてゐますぜ。廣々とした大きな野原だが、あれこそ魂消たものだ。あれこそ見るからに気持ちのいい、廣々としたところで、本當に神様のお授けもんだ！ その野原は、人の話だと、暖い海のすぐ傍まで續いてて、そこに綺麗な聲をしたガマユン鳥がゐて、冬でも秋でも木の葉の落ちることがねえし、金色の林檎が銀の枝になつて、人間は誰でも何不自由なく、まつとうな暮らしをしてるちゆう話だ……さういふところに俺も行つてみてえもんだ……なんせ、俺あかるぶん所々方々歩いたもんでさ！ ロムヌイにも行つたし、花の都のシンピリスクにも、金の圓頂閣で埋まつてゐる莫斯科へも行つたし、多くの人を養ふオカ河へも、可愛らしいツナ河へも、河の母と云はれるヴォルガへも行つて、多くの人たち——親切な基督信者たちも見れば、立派な町々にも暮らして来た……あゝ、もう一度あゝいふところへ行つてみたい……それこそ……本當にもう……かう思ふのは、罪の深い俺一人だけぢやねえ！ 他にも多くの信者たちが木の皮靴を穿いて

出かけて、世の中を歩き廻りながら、眞を探してゐるからな……さうだとも……だつて、うちにちつとして何になるかね、え？ 人間にや正直ちゆうものがねえんだ——これがいけねえこつた……」この最後の言葉を、カシヤンは殆ど聞きとれないくらゐ早口に云つた。それからまだ何か云つたけれど、私にはまるで聞きとれなかつた。彼の顔はなんとも云へない奇妙な表情を帯びて來たので、私はゆくりなくも「神が、り」と云つた言葉を思ひ出した。彼は目を伏せて、咳拂ひを一つすると、我に返つたやうな風であつた。

「このお天道様さまはどうだ！」と彼は小聲に云つた。「やれ、やれ、なんちゆう有難いお恵みだ！ いやもう森の中の暖けえこと！」

彼は兩肩を動かして、暫らく黙つたまゝで、ほんやりと目を据ゑながら、低い聲で歌ひ出した。長く節を引いてゐる歌の文句は、完全に聞きとれなかつたけれど、これだけのことは私の耳に入つた。

わしの名前はもとく／＼カシヤン

神名を蚤と云ひます……

「へえー」と私は考へた。「こいつはおまけに自作だわい……」すると、彼はきつと森の繁みの中を見透かしながら、身慄ひをして歌ひ止めた。私は振り返つて見ると、青い袖無し上衣を着て格子縞の切れで頭を縛り、日にやけたむき出しの手に編み籠を持つた、年の頃八つばかりの、小さな百姓娘が立つてゐた。娘は私達に出會はうとは夢にも思ひ設けなかつたらしい。謂はば不意に私たちにぶつかつたのであらう。緑の胡桃の茂みが深い蔭を落としてゐる草地にちつと立つて、黒い瞳でおづ／＼と私を見てゐるのであつた。こつちでその姿を見分ける暇もなく、娘は樹の後ろにかくれてしまつた。

「アンメシカ！ アンメシカ！ こつちへ來な、怖かながるこたあねえ。」と老人は優しく聲をかけた。

「怖かねえよ。」といふ細い聲が聞こえた。

「怖かなかねえ、俺のとこへ來な。」

アンメシカは無言のまま、隠れ所から出て、靜かにぐるつと大廻りして——その子供らしい息が深い草の中で微かな音を立てる——老人のすぐ傍の茂みから姿を現はした。背が小さいので、初めは八つぐらゐに見えたけれど、本當は十三か十四ぐらゐの娘であつた。身體全體は小つちやくて瘦せ

てゐたけれど、よく整つて、はしつこさうであつた。美しい小さな顔は、驚くばかりカシヤンに似てゐた。尤も、カシヤンは大して、男つぶりでもなかつたけれど。同じやうに鋭い顔立ち、同じやうに奇妙な眼付き、狡るさうでゐて正直で、もの思はしけな、人の腹を見すかすやうな眼付き、それに身のこなしまでそつくりであつた……カシヤンは娘をちらり見やつた。娘は横むきに佇んでゐた。

「どうだ、茸とつてゐたのか？」と彼は訊ねた。

「あ、茸を。」と娘は、臆病けな微笑みを浮かべながら答へた。

「たくさん見つかつたかい？」

「あ、たくさん。」(娘はすばしく老人をちらと見て、又につこり笑つた。)

「白茸もあるかい？」

「白茸もあるよ。」

「どれ、見せな、見せな……(娘は籠を腕から外して、茸にかぶせてあつた大きな牛蒡の葉を半分がた持ち上げて見せた。ほうー!)とカシヤンは籠の上に屈み込んで云つた。「こりや素晴らしい奴だ！ えらいぞ、アンメシカ！」

「カシヤン、これはお前の娘なのかい？」と私は訊ねた。(アンメシカの顔はほつと賑らんだ。)

「なに、ほんのちよつとした身内です。」とカシヤンはわざとらしく、事もなげに云つた。「さあ、アンメシカ、歸るがい、。」と直ぐに又かう云ひ足した。「さつさと歸るがい、でも、氣をつけてな……」

「おい、何故歩かして歸すんだ？」と私は遮つた。「乗せてやつたらいい、ぢやないか……」

アンメシカは罌粟の花のやうに眞つ赤になつて、両手で籠の紐を掴み、心配さうに老人の顔を見つた。

「なあに、無事に歸りますよ。」とカシヤンは、相變はらず掛け構ひのない大儀さうな聲で答へた。

「何もさう心配してやる事あねえ……一人だつて歸れませう……さあ行きな。」

アンメシカはすばしく森の中へ姿を隠した。カシヤンはその後を見送つてゐたが、やがて目を伏せて、にやりと笑つた。このゆつくりした微笑みにも、アンナに云つた僅かばかりの言葉にも、この娘に話しかけた時の聲の響きにも、言葉に盡くせない強い情合ひと、優しみが籠もつてゐた。彼はまた娘の行つた方を眺めて、もう一度ほ、笑んだ。そして顔を撫でながら、何度もひとり頷いてゐた。

「なんだつて、あんなに早く歸したんだ？」と私は訊ねた。「茸でも買つてやつたものを……」

「まあ、そんなものは、あなた、お氣が向いたら、うちへ歸つた時にでも買へますよ。」初めて「あなた」といふ言葉を遣ひながら、彼はかう答へた。

「あの子はなか／＼、縹緞よしだね。」

「いんや……そんなことが……たゞちよつと……」と何やら氣の進まぬ様子で答へると、それなり前と同じやうな無口になつてしまつた。

もう一度この男の口を解いてみようとして、色々手を盡くしてみたけれど、一同に甲斐がないのを見て、私は伐り出し場の方へ出かけた。それに暑さも幾らか凌ぎよくなつた。けれど、私の間の悪さ、俗にこの邊で云ふ「さんりんほう」は何時までも續いて、結局、水鶏一羽と新しい心棒だけを獲物にして、出村へ引つ返した。もう背戸の傍まで来た時、だしぬけにカシヤンが私の方を振返つた。「旦那、もし旦那。」と聲をかけた。「實あ、申し譯のない事をしましたよ。ありや儂が獲物をみんな逃がしたんで。」

「と云ふと？」

「そりや、ちゃんと禁厭を知つてゐるさあ。だもんだから、お前さんの犬はよく仕込んだい、犬だけんど、どうする事も出来なかつたんで。まあ考へてみると、人間なんてつまらねえもんだ。人間

なんて、ね？　だが駄だつて、人間が駄目にしてしまつたぢやねえか？」

私はカシヤンに、野の鳥を「禁厭ふ」なんて出来つこない、などと云つて聞かしても駄目だと思つたので、別に言葉を返さなかつた。それに、車はもう門の中に入つてしまつた。

アンマシカは家にゐなかつた。もうちゃんと歸つて来て、茸の入つた籠を置いたまゝ、どこかへ行つてしまつたのである。エロフェイは新しい心棒を先づこつ酷く値ぶみてしてから、車に取りつけた。一時間ばかりして、私は出發した。別れ際に少しばかりの金をカシヤンに置いて行つた。カシヤンは初め受け取らうとしなかつたが、やがてちよつと思案した後、掌の上に暫らく載せてから懐にしまつた。この一時間の間、彼は殆ど一口も物を云はなかつた。相變はず門に凭れたまゝ、馭者に叱言を云はれても受け答へをせず、私にも甚だ素つ氣ない別れの挨拶をした。

私は歸りつくが早いか、馭者のエロフェイがまたぞろ浮かぬ様子をしてゐるのに氣がついた。……それもその筈、この村では何一つ食べ物が見付からなかつたし、馬の水飼ひ場もひどかつたのである。私たちは出かけた。エロフェイは後姿にさへ不足らしい様子を見せて、馭者臺に坐り込み、私に話しかけてたくて堪らないくせに、私の方から問ひかけるのを待ち受けながら、小さな聲でぶつぶつ云つたり、馬に向かつてお説教めいたことを云つたり、時には皮肉らしい言葉を洩らしたりす

るだけで、やつと我慢してゐた。

「村だつて！」と、彼はぶつくさ云ふのであつた。「あれでも村なのか！ 高がクワスぐらゐ買はうと思つても、クワスもありやしねえ……やれ、やれ、呆れたもんだ！ それに水ときたら、それこそべつ、べつだ——（と音のするほど唾を吐いた。）胡瓜もなけりや、クワスもねえ——なんにもありやしねえ……はい、どう」と、彼は右の脇馬に向かつて大きな聲で附け足した。「手前の腹の中は分かつてゐるぞ、この横着者め！ 白つぱくれるのが大好きなんだらう……（かう云つて一鞭くれた。）すつかりするけ癖がつきやがつた、畜生。もとはとても聞分けのいゝ馬だつたに……ほうら、氣いつけるよ……！」

「あ、さうだ、エロフェイ」と私は云ひ出した。「あのカシャンてのはどんな人間だい？」

エロフェイは直ぐには返事をしなかつた。この男は一體に考へ深い、ゆつくりと落ちついた人間なのである。けれど、私に問ひかけられて嬉しくなり、ほつと安心したらしいのは、すぐさまそれと察しられた。

「蚤のことですかね？」到頭エロフェイは手綱をぐいと引いて云ひ出した。「變はり者ですよ。全く氣が變なんですよ。あんな變はり者はちよつと他に見付かりませんや。まあ、噂へてみりや、それ、

この蓋毛の奴とそつくりそのまゝですよ。何をやつても手につかない……仕事なんか尙更のことです。そりや、もう、働き人なんて云へるものですか——骨と皮ばかりなんですがすからね——まあ、それでも……なんせ、餓鬼の時分からあの通りなんです。初手は自分の伯父貴たちと馬力をやつてゐたもんでがすよ。馬車は三頭立てを使つてをりましたつけ。さあ、ところが、そのうちに倦きが来て——おつ放り出してしまつた。で、我が家で暮らすやうになつたが、さて、家に尻が据わらない、まことに落ちつきのねえ奴で——全く蚤ですよ。まあいゝ按配に、優しい旦那に當たつたもんだから、無理に働かされもしなかつたんですがね。かう云つたわけで、それからといふもの、まるで野放しの羊同然、のべつうろく歩き廻つてをりますわ。いやはや、得體の知れねえ不思議な奴で、切り株みてえに黙りこくつてゐるかと思ふと、今度は急にべらく喋り出す。——しかも何を喋つてるのか、ちんぷんかんぷん分かりやしませんや。一體あんな法つてあるもんですかね！ ありや法に外れてまさあ。全く突拍子もねえ野郎ですよ。でも歌は上手で、こんな風に勿體をつけてね——なかく、相當なもんですよ。」

「だが、どうだね、病氣の療治をするつてのは、本當かね？」

「なんの、療治なんか……へん、あいつにそんなことが出来ますかい！ そんな柄ぢやありません

んよ！ 尤もわつしの癩癩を癒しちゃくれましたがね……どうしてあいつなんか！ 正真正銘の馬鹿でさあ。」暫らく黙つてゐた後で、彼はかう云ひ足した。

「前からあの男を知つてゐるのかい？」

「さやうで。わつしら二人はクラシーワヤ・メーチのスイチョフカで隣り同志だつたもんですから。」
「ところで、あの森の中で出會はした娘、アンメシカとやらは何にあたるんだね、あれの身内なのかい？」

エロフェイは肩越しに私を振り返つて、一杯に口を開けながら笑つた。

「へ、……さやう、身内です。あの子は孤兒で、母親がねえんですが。第一、誰があれの母親だか、それさへ分からねえやうな始末で。まあ、きつと身内なんでせうよ。恐ろしくあいつに似てゐますからね……とにかく、あいつのところにもますよ。はしつこい娘で、文句なしにい、娘ですよ。あの親爺、眼に入れても痛くねえほど可愛がつてゐるまきあ、い、娘でしてね。それあの男、旦那様は本當にやなざるまいが、あいつはアンメシカに讀み書きを教へてやらうなんて考へてるらしいんで。あの男なら、本當にやりかねないこつて、何にしても術はづれた男ですからねえ。氣の定まらない、突拍子もない野郎で、どう、どう、どう！」取者はだしぬけに、自分で自分の話を断

ち切りながら、馬を止めて、横に身を乗り出し、鼻をひく／＼さした。「こりやたしかに焦げる臭ひらしいぞ！ やつぱりさうだ！ どうも新らしい心棒といふ奴は……あれほどふんだんに油を塗つておいたんだが……どら、水でも汲んで来るかな。あ、丁度さいはひ、池がある。」

エロフェイはゆつくりと取者臺から下りて、手桶を解いて池の方へ出かけて行つた。歸つて來ると、不意に水をかけられた車輪の轂がしゅんと鳴るのを、満足さうに聞いてゐた……十露里ばかりしか行かない間に、彼は熱くなつた心棒へ六遍も水をかけなければならなかつた。私たちが家へ歸つた時には、もうとつぶり日が暮れてゐた。

昭和二十一年十月一日初版印刷
昭和二十一年十月五月初版發行



「讀聖人日記」は近々發行
の豫定です。御愛讀を乞ふ。

獵人日記

定價十八圓

譯者

米川正夫

發行者

東京都神田區神保町三ノ廿八
藤井嘉作

印刷者

東京都京橋區銀座三ノ四
佐藤保太郎

發行所

東京都神田區神保町三ノ廿九
(江戸ビル内)
振替口座東京一三三九九〇番
第三書房
出協會員番號二〇四〇〇七

配給元

日本出版配給株式會社

シエスタコフ原著
荒川實藏譯

ソ 聯 史

B 六判 二七〇頁
定價十七圓 送料一圓五〇錢

今次大戰に示した實力、世界の驚異となつたソ聯の底力は如何にして培はれたか、共産ソ聯は如何にして成つたか、吾々は歴史によつてソ聯を見よう。ここに何等の宣傳を含まず、科學的根據によつた歴史を紹介した。原著はソ聯に於て初版忽ち五百萬部を賣り盡し廣く教科書となつた名著である。

伊藤 職雄 著

ロシヤ語自修

B 六判 二二二頁
定價十八圓 送料一圓五〇錢

ロシヤ語獨學者の爲第一步から初め中級程度に至る課程を懇切丁寧に説明す。内容は發音、文法、譯解、作文に分ち、順を追つて詳細に講義した。特に練習問題を多く掲げ學習者の力試とし後尾にこれが解答を附した。

發行所 第三書房

東京都神田區神保町三ノ廿九(江戸ビル内)
振替口座東京一三三九九〇番



F83
Tv5
3a



日六拾月五年午丁

492

閏	閏	閏	閏	閏	閏	閏	閏	閏	閏



終

